

他者になる夢の現象学的解明 ——フッサール志向性論に基づく主題分析

渡辺恒夫 東邦大学名誉教授

WATANABE Tsuneo Professor Emeritus at Toho University

要約

現実には不可能な他者変身がなぜ夢では可能なのかの現象学的解明を行う。筆者自身が夢日記ウェブサイトに掲載した99例の自己体験夢事例より15例の他者変身夢を抽出してデータとした。方法はシェフィールド学派に学び、フッサールの志向性論から関連する志向性分類表を作成して主題分析に用いた。ジオルジの記述的現象学の方法に倣い、夢テキストの段階的分析進行表を作成して分析を行うが、夢の現象学独自の方法として、夢テキストに想像的変更を加えて現実テキストを作成し、両者を比較しつつ主題分析を行うことで、他者変身夢に固有の構造的特徴を抽出した。各例の構造的特徴の比較の結果、適切な分類に達することで他者変身夢の全貌が明らかになった。分類中、虚構の他者への変身と実在他者への変身が最重要な区分とされ、前者は「準現在化対象の現在化」、後者は「向現前化対象の現前化」として主題分析された。現象学的解明として、前者は現実における二重の志向作用が、後者は同じく三重の志向作用が、共に夢では一重になることで他者変身が実現するとされたが、後者の解明には、ヘルトが他者経験における向現前化を二種の準現在化の協働作業として分析しているところに基づく、フッサールの志向性分類表の改訂版を用いた。最後に、本稿でなされた他者変身夢の現象学的解明が、他者経験の自明性をさらに問題化する途を拓く可能性が論じられた。

キーワード

ウェブサイト掲載の自己体験事例, 記述的現象学, 想像的変更, 虚構他者vs. 実在他者, 向現前化

Title

Phenomenologically Clarifying Dreams of Becoming Someone Else: Thematic Analysis Based on the Husserlian Intentionalities

Abstract

Fifteen samples were taken from the author's "dream-diary" website to phenomenologically clarify why a dreamer can become someone else in dreams. As suggested by the Sheffield school, the author developed a table of intentionalities based on the works of Husserl, to use it in Thematic Analysis. "Real texts" were developed through "imaginative variations" of dream texts, which is a method specific to dream analysis. Phenomenological structures were extracted by comparing each dream text with its corresponding "real text" through Thematic Analysis. Then, each example of a dream was classified according to its structural features. Results indicated essential differences between examples of becoming fictive others, in which double intentional structures are reduced to single ones, and those of becoming real others, in which triple intentional structures are reduced to single ones. The phenomenological clarification of these difference was conducted using the table of intentionalities modified according to the critically reconstructed Husserlian theory of "appresentation" described by Held. Finally, the author discusses how our seemingly obvious experiences with others in the real world should be phenomenologically analyzed.

Key words

examples out of the author's own website, descriptive phenomenology, "imaginative variation", fictive vs. real others, "appresentation"

I 序論

I-1 問題提起——他者になれない現実と他者になる夢と

いくら「もし自分がある人だったら」と空想しても現実には他の誰にもなることはできない。私は私であって他人ではないことは自明だからである。ところが夢の中では私は他の誰かになっていることがある。この体験が驚きをもたらすとしたらそれは、「他者ではない」「他者になれない」という事態が絶対的に自明であるわけではないことを予感させるからだろう。そもそも、なぜ夢では他者になることができるのだろうか。まず、他の領域での類似テーマと比べることで、この問いの意義をより広い共通理解性の下に置いてみよう。

私自身、数え年九才のころに起きた最初の自我意識の体験を思い出す。たしか或る日、小学校からの帰り道のことだったと思うが、私は突如、自分というものは他の誰ともことなる存在であることを理解した。それは、何か電光のように私の幼い心を震撼したことを覚えている。私がどんなに努力したところで、自分と別の存在になることはできず、自分であることをやめることができないという痛切な自覚が、その瞬間私の心に誕生したのである。

(土居, 1967, pp.100-101)

著名な精神分析学者による回想である。自分は自分であって他の誰にもなれないという自覚が「電光のように私の幼い心を震撼」したことは、「私は私であって他人ではない」ことの自明性が、見かけほどには自明でないことをも示唆していよう。事実、土居のこの回想は、その後、自我体験の研究でくりかえし引用されることになるが（西村洲衛男, 1978; 渡辺, 2016a), それらの研究の中で自我体験は、精神発達の過程で生じ得る「自己の自明性の破れ」（渡辺, 2009）として特徴づけられているのである。

次に参照可能なのは精神病理学の領域である。これ

については自己の自明性ということを経験学的に考察した木村敏の説がある（木村, 1973）。彼によると、常識的日常世界はあまりにも自明なので、その構造を問うことは統合失調症者の「妄想」的な体験世界を通じてしか可能とならない。こうして具体的な症例を検討して明らかにされた自明なる常識的日常世界の構造は、「個物の個別性」「個物の同一性」「世界の単一性」という三つの「原理」で表されるが、この「個物」ということについては「自分」についてもいえることである。

常識的日常性においては、私自身は私以外のだれかの自分とは絶対的に別の自分であって、うっかりしてとり違えたり、間違っって入れ替わったりするようなことは絶対に起こりえない。／ところが、この個物の個別性の原理は、前章の症例の患者においてはまったくその効力を失っている。この患者においては「Oさん二人いるんです。一人であって二人ということなんです。……一つが二つで二つが一つ……私がOさんになってOさんが私になって」ということになる。

(木村, 1973, pp.110-111) ¹⁾

上記の二例は、現実には他者になれないことを必須の契機とする**自己の自明性**ということに焦点を当てた問題領域に位置づけられているが、その裏面では、同じく他者になれないことを必須の契機とする他者経験の自明性も問題になるはずである。本稿の、なぜ夢では他者変身が可能なのかの問いは、むしろ**他者経験の自明性**を問うという問題領域を拓くものになるかもしれない。けれども今はそれは措いて、「総合的考察」の項で振り返ることにしよう。何といたっても現時点では、そもそも本稿の問いがどのような形で解明可能となるかさえ、五里霧中の状態なのであるから。

本稿の問いの困難さのひとつは、他者変身夢というテーマを取り上げた先行研究が見出しがたいということにある。夢事例はいわゆる臨床家でなくとも収集できて大量収集も可能だという利点を持つことを思うと、木村がなぜ夢に言及しないか不思議な位であるが、ひとつには、木村にとって参照すべき「他者になる夢」についての研究が見出せなかったこともあるの

ではないか。この事態は現在でも変わっていないように思われる。他者変身夢を主題とした組織的研究というものを、筆者は未だに見出していないのである。したがって本稿は、まず先行研究を検討するという通常の論文作法を取ることができない。その代わりに序論中で「方法の問題」と題し、このテーマへ適合的な方法を独自に見出すべく試みることにする。なお、方法の問題に入る前に、他者変身夢という現象の共通理解性を高め、併せて本稿の目標をより明確に設定するために、例を一つ掲げておくことにする。

公園のような野外で私と妹がアイスクリーム売りのバイトをしている。……働いているうち私は「ドラゴンボール」のベジータになっていて、妹はブルマーになっている。客の行列の中に父と母がいる。父は私だと気づかずに店員のベジータ（私）に、好物のいちごアイス注文する。ベジータの私はいちごアイスを作っているうちに、自分で食べたくなってくる。／ここまでは私は、ベジータ側から見ている。そこから私は父になる。父（私）は「早くできないかな」と思っている。やっとアイスが出てきた。ところが食べてみると、アイスクリームではなくいちごキャンディーだった。ベジータの姿をした店員がいちごアイスをこっそり食べているの見える。父（私）は「ずるいやつだ」と思いつながりキャンディーを食べる。……

大学生の実際の夢事例をもとに作成した見本事例である²⁾。この事例から窺えることは、他者への変身といっても一様ではないことである。第一に、「私」はまず「ベジータ」に変身し、次いで「父」に変身しているが、前者は**虚構の他者**で後者は**実在の他者**というように、変身対象としての他者の存在の仕方に種類がある。第二に、「私」は「ベジータ」に**いつのまにか**なっているが、次に登場人物として**目の前にしている**「父」になるというように、変身の道筋も多様であることが分かる。

このように、他者への変身といっても一筋縄ではなく、しかも先行研究への参照が望めない以上、他者になる夢の全体像を本稿において独自に明らかにしておかなければならない。全体像を踏まえない限り、他者になる夢事例の選択にしても恣意的になりかねないだ

ろう。したがって本稿の目標は二重となる。まず他者変身夢の全貌を明らかにした上で、なぜ他者になることが可能なのかを問うのである。

1-2 方法の問題——フッサールへの廻りから 方法論的展開へ

夢のテキスト・データを分析する方法としては深層心理学的方法や認知科学的方法もあるが、本稿では現象学的心理学の方法を採用する。同一テーマでの先行研究が見出されていない以上、具体的な研究への批判ではなく「この方法を用いればどのようなことになるか」という仮想的批判になるが、まず、深層心理学的方法が適合的なのは、前述の見本事例に即していえば、「私」はなぜ「ブルマー」（女性）や母親ではなく「ベジータ」（男性）と「父」に変身したのかの**個別的な**問いの方であって、**一般に**他者変身がなぜ可能なのかという本稿の問いではない。本稿の問いの解明が同一化といった深層心理学の概念の基礎づけになりえても、逆に同一化によって他者変身の一般的可能性を説明することはできないであろう（これについては「総合的考察」でも触れる）。次に認知科学的方法は、睡眠実験室でのデータ収集が数量化に耐えうる大規模データを必要とするので（岡田, 2011, 等参照）、筆者にはその準備がないし、将来的に可能になるとしても本誌とは別の場所での発表になるだろう。他方、現象学的心理学は次の利点を持つ。①すでに引用した木村（1973）の考察が現象学的精神医学の枠組みでなされているし、自我体験研究でも現象学的研究が一つの流れになっているので（Spiegelberg, 1964; Watanabe, 2011; 渡辺, 2012）、他者変身夢研究を将来的にこれらの領域と比較するのに好都合なこと。②主観的意識体験を探究の対象とする現象学は元々夢になじみやすく、夢の現象学を何らかの形で謳った成書が日本にも何点か紹介されている程であること（Sartre, 1955/1940; Binswanger, 2001/1947; Boss, 1970/1953; Caillois, 1986/1956; Usler, 1990/1969, 等）。ただし、これらの成書に共通する問題点として、分析方法が職人芸的であって、かつハイデガー以後の実存哲学の影響下にあり哲学的になりすぎると、個性が強すぎて一代限りになってしまっていることがある。本研究は、現

象学の質的心理学としての展開の気運の中で（西村ユミ, 2013; Giorgi, 2013/2009; Langdrige, 2016/2007, 等参照）、夢の現象学を継承発展可能な研究領域とするという、方法論的自覚の元になされている。

現象学的心理学といっても単一ではない。現象学の創始者フッサールに比較的忠実な記述的現象学の流れと、ハイデガー以後の現象学の解釈学的な展開を踏まえた解釈学的な現象学の流れに大別され（Langdrige, 2016/2007, 参照）、本稿が位置づけられるのは前者の方となる。なぜ前者を選ぶかを既存の質的心理学的な研究を具体的に概観して説明するような余裕は本稿にはないが、さいわい、質的心理学研究から見て外部に属する研究ではあるが手掛かりがあるので、以下に示す。

前述のボス（1970/1953）は、ハイデガー哲学を承けて現存在分析を唱える現象学的精神医学者であるが、「夢の中で『物として存在する』こと」という項目の下に、女性患者から報告された、雑巾になる夢や風船になる夢について次のように述べている。

夢の雑巾として肉体化されたのは、深刻な抑うつ性の気分変調から実際完全にたんでしまっただの上によこたわっている実存である。……天井にまで上がってしまう子どもの風船という物体の中に肉体化されたのは、世界の物体や人間に対してもっばら大へん子供っぽく、軽々と浮動する、戯れ半分の関係を示しているような現存在であった。（p.224）。

アメリカの現象学的哲学者ドゥ・ウォレン（de Warren, 2009/2009）は、フッサールは夢についてのまとまった記述を残していないとしながらも、その遺稿集などに散在する記述を元に、フッサールの夢と想像に関する説を次のように再構成している。

私が目覚めているとすると、私が想像しているという暗黙裡の覚知が存するが、夢を見ている場合には、私が実際に眠っているとすれば、私が夢を見ているという比較されうるような覚知は存しないのである。（p.97）

フッサールにとっての想像的なものとは、分裂した、ないしは二重の意識である。……子供はたやすく、自分がライオンのふりをすることが何なのかを理解することができる。彼女はライオンのように吼え、ライオンの脅すような顔をする。……しかも子供はまた自分がライオンではないことも知っている。その上これら二つの考え、ないしは二つの意識のあり方は、両者が互いに両立可能なものであるとしても、結びつくものではない。（p.98）

ボスのハイデガー的な解釈は前述の見本事例に照らしていえば、「私」はなぜ「ブルマー」でなく「ベジータ」になったかの問いの方に適合的である。これに対してドゥ・ウォレンのフッサール論は、そもそもなぜ夢の中で他者になることが可能なのかという本研究での問いにとって、（次頁で見ると）筆者の知る限り最も近くに位置していると思われる。したがって本稿は、単に記述的現象学の流れに位置づけられるというだけではない。このように重要な示唆を含むことが予想されるフッサール自身の現象学の構想にまで立ち戻り、そこから本研究にとって適合的な質的研究法をつかみだす必要が出てくる。

ちなみに、フッサール（Husserl, 2004/1968）が超越論的現象学と心理学的現象学（または現象学的心理学）という二種類の現象学を構想していたことはあまり知られていない。本稿でいう「フッサール現象学」は無論、心理学的現象学の方を指す。前述の記述的現象学の流れに重なるが、なぜこの名を使わないかという点、a) フッサールではなくヤスパース由来の、単に主観的体験を忠実に記述するという意味での方法にすでに記述現象学の名が用いられていてまぎらわしいこと、b) 「記述的現象学を用いる心理学者は、現象を説明するより現象を記述することに関心がある」（Langdrige, 2016/2007, p.118）という特徴づけにもかかわらず、本研究が目指すのは「なぜ」に答えるという「現象学的解明」（II-3参照）であること、c) 現象学的解明のためにフッサールその人の学説まで遡っての構想と方法論の検討が必要になること、という3つの理由による。

(1) フッサー現象学の基本アイデア

—志向性分析

先述のドゥ・ウォレン (2009) の引用を読めば、想像するという意識の構造の分析が、変身夢の解明にとって鍵となることが予想される。ライオンのふりをする子どもは、現実ではそのような想像をしつつも想像に過ぎないことを自覚しているという「二重の意識」を維持しているが、夢では『自分がライオンである』と想像しているという暗黙裡の覚知が失われて一重になり、「自分がライオンである」という事態が出現する、と想定できるから。このような意識構造の分析はフッサーでは志向性分析といわれ、主として想起や予期などの時間的志向意識 (志向性) の分析を中心に展開されている。ちなみに志向性はフッサーがその師ブレンターノから受け継いだ基本着想で、AをBとして経験するという意識の作用である (Spiegelberg, 2000/1994 参照)。たとえば会議の情景を思い浮かべるにしても、明日の予定として思い浮かべると「予期」という志向性になり、昨日あった教授会の光景として思い浮かべれば「想起」という志向性になる。ドゥ・ウォレン (2009) の例でいえば、子どもは自分をライオンとして思い浮かべているが、これは「空想」という志向性である。想起や予期や空想に共通の、「現にない対象を現にあるもののように思い浮かべる」という作用をフッサーは「準現在化」と呼び、「現にある対象の知覚」を「現在化」と呼んで、志向性を二大別する (木田・野家・村田・鷺田, 1994; 谷, 1998 など参照)。さらにドゥ・ウォレンの説明を参考にすれば、準現在化の構造的特徴は、対象を思い浮かべると同時に「思い浮かべているに過ぎない」と自覚しているという、二重の意識にある。夢では後者の自覚が消滅する。その結果、「思い浮かべられた対象」だけの一重構造になる。つまり準現在化が夢では現在化へと変容する。渡辺 (2010) は、夢世界では「想起も、予期も、反実仮想の想像も、フィクションも、即、知覚となり現在の体験となって、『これが現実だ』という確信を与える」(pp.215-216) と述べている。空想以外でも一般に準現在化は、夢の中で現在化されると考えられるのである。

フッサー現象学による夢分析の基本着想がここに示唆されている。現実では準現在化という二重の志向

的意識であった事態が、夢では現在化という一重の志向的意識へと構造変容する。これこそが、夢の現象学的解明にとっての鍵となる着想と思われる。

(2) 現象学的還元と本質観取

フッサー現象学の方法論的基本は現象学的還元と本質観取の二つであり、これは心理学的現象学でも変わらない。現象学的還元とは、対象についての「臆見 (思い込み)」を、反省によって「現象」という確実な知識へ還元することである。目の前の花瓶は客観的に実在すると私は思い込んでいるが、幻覚かもしれないし夢かもしれない。けれども花瓶が見えるという「花瓶という現象」だけは疑うことができない。このように花瓶についての「客観的に実在する」という思い込みを括弧に入れて「花瓶現象」へと還元するのが、現象学的還元である。

ところで、すでに「夢かもしれない」といった言葉を使ったところからも窺えるように、現実と夢とで現象学的還元は逆を向いているところがある。現実世界では花瓶が実在するという判断を括弧入れするのに、夢テキストに現れた花瓶については「夢だから実在しない」という判断を括弧入れするのである。この**逆向き現象学的還元**の結果は重大である。ウスラー (Usler, 1990) は、夢を、現実から因果的に説明されるべき幻覚としてではなく、「夢世界」として現実世界と対等に扱うことが夢の現象学であるとしたが、本研究でも現象学的還元の結果、「夢世界」と「現実世界」が対等に扱われることになる (夢と現実の区別が付かなくなるのではないかという疑問に対しては、**その中にあって夢についての現象学的考察をしている世界の方**を「現実世界」と定義するという、操作的定義を以て答えておく)。二つの「世界」を比較して基本的な体験構造の違いを抽出することが、次の本質観取の仕事になる。

科学では仮説を構成して検証・反証するというサイクルで研究が進むが、現象学では原則として仮説を作らず、代わりに本質観取という方法を使う (西, 2001 参照)。具体的には想像的自由変更、略して想像的変更という方法を使う。三角形の本質とは何かを観取するのに、目の前に三角形を一つ描き、それを想像裏に変容させてみると、三つの辺のうちどれかが曲線に

なったり辺同士が交わる角に間隙ができたりしたら三角形という経験が成立しなくなることが分かる。だから三角形の本質とは三角形という経験が成立するのに必須の構造的特徴のことであり、三本の直線的線分で囲まれていて線分の終端同士がぴったり合わさっていること、となる。心理学研究としての現象学において想像的変更の代わりとされてきたのが、標本収集による複数データの比較である。「現象学的心理学者は本質というものを、多数の当事者による多元的な記述を通じて識別しようとする傾向があった。これは事実上、標本収集による想像的変更である」(Langdrige, 2016/2007, p.26)。複数データを使うといっても、実証科学における「観察データ」と「仮説」とが互いに独立しているのに対し(ハンソン(Hanson, 1986/1956)は観察の理論負荷性を指摘しているが、独立性という建前があってこそその指摘だろう)、観取された「本質」はデータから独立ではない。したがって最初に観取された本質が後のデータによって訂正されることがあっても、仮説の交代とは違う。当初は気づかなかつた重要な構造的特徴が浮上して最初の構造的特徴が目立たなくなるなどして、より**精緻化・普遍化**されるということなのである。

本質観取の具体的手順をできるだけ明示化することが、現象学的心理学の質的心理学研究としての発展には重要である。代表的な技法としてジオルジ(Giorgi, 2013/2009)の、現象学的分析進行表を作成し、体験記述テキストを意味単位に分けることから始めて段階的に分析を進めて本質の意味を取り出すに至る方法があるが(渡辺, 2012, 2013も参照)、以下明らかになるように夢分析にそのまま適用するには難があり、工夫が必要になる。そもそも現象学的研究では、伝統的科学的心理学におけるように予め設定された一般的な研究手続きを、個別のテーマに適用するわけではない。研究されるべき「現象に特有の性質の方が、特定の研究手続きと記述のツールを定めるためには重要」(Seamon, 2000, p.167)なのである。まして夢のフッサール現象学的分析のような未開拓な領域にあっては、夢という現象の固有性に即した方法を、最初の試みには避けたい粗削りのそしりを恐れずに工夫しなければならないのである。

なお、「本質」の語が心理学にはなじまないことも

あり、以後、ジオルジ(2013/2009)に倣い、「本質観取」の代わりに「構造的特徴の抽出」「現象学的構造の抽出」等の表現を用いることがある。

(3) 現象学的夢分析に固有の技法1——主題分析

夢分析に固有の問題として、夢世界の現象学的構造を現実世界のそれとそのつど比較しながら、複数の夢テキストの分析を進めなければならないことがある。従来の本質観取の方法では複数データの比較は同質のデータ相互の二項比較に基づくのに対し、〈夢事例① vs. 現実〉vs. 〈夢事例② vs. 現実〉というように、三項比較が必要になってくるのである。このような複雑な比較を行うには、比較項を予め定める主題分析が好都合に思われる。その点、イギリスはシェフィールド大学のアッシュワース(Ashworth, P., 2003)を中心に発展し、シェフィールド学派と呼ばれるに至った記述現象学一派(Langdrige, 2016/2007, 参照)の方法が示唆的である。この学派では、ジオルジの方法では取り出すべき体験の意味(=観取すべき本質)が予め分からないのに対し、発見的手法(ヒューリスティック)として、晩期フッサール(Husserl, 1995/1954)の生活世界論から生活世界の7つの条件(自己性、社会性、身体性、時間性、空間性、企図、言語)を、「人間的経験に基本的な本質的構造」(Ashworth, P., 2003, p.146)と見なして抽出し、「主題分析」(Finlay, 2003, p.112)に用いる。たとえば重大な疾患の診断を受けた人の生活世界が、以前と比べどのように変容したかを、7つの条件(=主題)ごとに本人の自己記述を分析して明確にする(Ashworth, A. & Ashworth, P., 2003; Finlay, 2003, 等)。この主題分析の方法は夢分析にも示唆的と思われる。ただし、他者への変身夢というテーマに関心相関的に、フッサール中期から後期にかけての想像意識論と他者論に、夢と想像と他者経験にとって「基本的な本質的構造」を求める。それが、基本的な志向性の種類ということになる。

(4) 現象学的夢分析に固有の技法2——夢テキストから現実テキストへの想像的変更

夢世界の現象学的分析が夢事例テキストに基づく以上、比較対象となる現実世界の分析も事例テキストに基づかねばならないのだろうか。夢日記から抽出した

事例に似た「現実事例テキスト」を、「現実日記」から探し出すべきだろうか。ここで想像的変更という技法が直接に役立つ。I-1の「見本事例」を例にとると、私と妹がアイスクリームを売っているという状況が現実になっていると想像するのである。ただし「ベジータ」や「父」に変身するくだけは現実には起こり得ない。だから、**起こり得るように**、つまり私が「ベジータ」になっていて、妹はブルマーになっている」という文章は、「私は『自分がベジータになっていて、妹はブルマーになっている』と想像している」という鍵括弧付き文章に**変更**して読む。こうして想像的変更によって生成した「現実テキスト」と元の夢テキストとが、志向性に関してどのように異なるかを比較考察する。

以上、(3)(4)での夢の現象学的分析に固有の技法をまとめ、「フッサー志向性論に基づく主題分析」と呼んでおきたい。なお、本研究で現象学的解明と呼ぶ一段深い分析を行うためには、さらにこの想像的変更を逆向きに遡る手続きが必要になるが、詳しくは「方法」で述べる。

II 方法

II-1 データ

筆者の個人サイト（参照先は「付記」を参照）に公開されている夢記録事例、すなわち自己体験事例を、データ・プールとして用いる。自己体験事例は、エルヴェ・ド・サン＝ドニ（Hervey de Saint-Denys, 2012/1964）やエリス（Ellis, 1941/1911）のような伝説的な夢研究者だけでなく、フロイト（Freud, 2007/1942, 2011/1942）も使っていた伝統的データソースであるが、ウェブ公開された事例のみを用いることには、誰でもデータソースにアクセスできることで読者自らが分析に参加しつつ、本稿でのデータ抽出や分析をチェックできるという利点がある。ただし、チェックにあたっては、本研究と同様の現象学的態度を要する。そのためには、他者の体験テキストであっても自分自身の体験として読むという、「体験事例テキスト

の一人称的読み」（渡辺, 2013参照）を要請しておきたい。特定の他人の夢であることを括弧に入れて自分自身の夢として読まない限り、夢世界と現実世界を対等に扱うことにならないからである³⁾。公表済みデータを使うという点では、出版された夢記録、他の人が公開している夢日記サイト等を使うこともありえるが、筆者の自己体験事例を含めて分析するには分析者である筆者自身からデータが等距離でなくなって分析の同質性が保証されない。また筆者の自己事例は全99例あって質的分析のデータとして十分な数である。以上の理由で筆者の自己事例のみとした。日付は1970年代に同人誌に「夢日記」として発表した5例と（記事はPDF化して同じサイトに掲載済み）、2004年から個人サイトに夢日記として掲載し始めてから2015年11月7日にいたるまでの12年程にわたる94例からなる（両群間には甚だしい時間的隔りがあるが、両群とも自己事例かつ公表データという条件を満たす以上、どちらかに限らねばならない積極的理由は見出せなかった）。前述の伝説的な夢研究者たちのように毎朝欠かさず夢を記録するのではなく、興味のある夢が時間的余裕のある場合に限ってまずノートに記され、その中から特に興味深い夢が選択され公開に至るといふ、関心相関的に抽出されたデータである。なお、ウェブ公開にあたって実在の登場人物の匿名化を図るなどして倫理的問題にはすでに対処済みであると考えながら、本稿執筆にあたってチェックし直して問題のないことを確認した。

II-2 分析の手順

具体的な分析手順としては、1) 主題分析に用いるべく、フッサー現象学における基本的な現象学的構造である志向性を、想像意識と他者意識に関して取り出し分類し表とする。2) 「他者になる夢」に分類できる事例をサイト公開事例の中からすべてリストアップし、特徴を書き添えて表とする。3) リスト中から「出発事例」を関心相関的に抽出し、段階的分析進行表を作成する。第一段階として表の左欄にテキストを意味単位に区切って書き入れる。第二段階では、「夢テキストの現実テキストへの想像的変更」を行って夢テキストから「現実テキスト」を生成する。第三段階

では「夢テキスト」と「現実テキスト」を比較して、「現実には他者になれないのに夢ではなれる」事態に関連していると思われる志向性の違いを抽出するという主題分析を行って結果を書き込む。これが、I-2(2)でいう「最初に観取された本質」に当たる。4)すべての夢事例について同様に「本質観取」を行い、順次相互比較することで夢としての特徴を普遍化・精緻化していく。ここで普遍化とは、事例同士の共通項の、精緻化とは同じく差異項の、抽出を指す。したがってその結果、全事例の適切な（現象学的構造を反映した）分類に到達するはずである。これをもって、本稿の第一の目標である他者になる夢の全体像が、明らかにできることが期待される。具体的には「Ⅲ 結果1」で記述する。

Ⅱ-3 現象学的解明の手続き

本稿の第二の目標は、「夢でなぜ他者になることができるのか」の現象学的解明にある。ここで現象学的解明とは、問題となっている個別現象がより普遍的基底的な現象学的構造の一例であることを示すことである⁴⁾。ここで、より普遍的とはどの程度のことを意味するのかという問題が生じよう。ジオルジ(2013/2009)は、哲学としての超越論的現象学に比べると現象学的心理学の目標は「中範囲」の本質に達すること、としている。が、どの程度が中範囲かは事前に決めることが難しい以上、問題関心に相関的に決まるとしか言いようがないであろう(渡辺, 2014)。本研究では上記の「なぜ」に答えを得るに至ることを目標にする。具体的には想像的変更を逆向きに辿るという手続きに訴える。すなわち、まず夢テキストと、それを想像的に変更することで生成した現実テキスト双方の、背景となる現象学的構造(=志向的構造)をそれぞれ明確化する。そして「現実テキスト／現象学的構造」⇔「夢テキスト／現象学的構造」と、現象学的構造の水準で現実から夢へと逆向きに辿ることをもって現象学的解明とする(これだけでは分かりにくいので具体的には「Ⅳ 結果2」を参照のこと)。ただしその結果、それまでに示されたフッサール志向性論に基づく主題分析では済まず、前提であるフッサールの理論そのものを検討し、結果的に志向性分類表を改訂

する必要が出てくるかもしれない。したがって、「夢でなぜ他者になることができるのか」の現象学的解明には、節を改め「Ⅳ 結果2」において当たることにはしたい。

Ⅲ 結果1——他者になる夢の全体像

Ⅲ-1 現実世界の現象学的基本構造としての志向性の諸様相

フッサール現象学における現実世界の現象学的構造を用いて主題分析を行うべく、志向性を想像意識と他者意識に関して取り出して表1にした。なお、シェフィールド学派では(Ashworth, P., 2003)フッサールの「生活世界」の7条件を取り出すのに、フッサールの原典が難解な上に各所に散在しているため、メルロ＝ポンティ(Merleau-Ponty, 1982/1945)の記述に頼っているが、本稿ではそれに当たるものとして、本誌読者にとっての利用しやすさを考慮して『現象学事典』(木田ら, 1994)に依拠し、本稿と関係の深い『内的時間意識の現象学』(Husserl, 2016/1966)で補った。訳語も『現象学事典』に準拠したが、そうしない場合は理由を記した。

この表で見ると、志向的意識は現在化(=知覚)と準現在化(=知覚以外)というように、まず大別される。ところが表の下部では、〈現前化(Präsentation)／向現前化(Appräsentation)〉として知覚と他者経験とが改めて対比されている⁵⁾。〈現在化／準現在化〉という対語と別の対語が登場するのはなぜだろうか。向現前化とは、フッサールが『デカルト的省察』において、他者経験の独自性を記述するために導入した語である(木田ら, 1994, p.138参照)。向現前化は、他者の知覚を直接知覚できないという意味で準現在化の一種であり、しかも私は他者の存在を確信しているという意味で定立的準現在化の一つであり、「感情移入する準現在化」(Husserl, 2015b, p.474)とも称されるが、想起や予期と異なり、過去現在未来にわたって決して現在化しない。このように独特な志向性のあり方を指すのに、向現前化の語が登場してく

表1 フッサールにおける志向性の諸様相

| 志向性の種類 | 意識の様相 | 解 説*** |
|---|--------------|---|
| 現在化 (Gegenwärtigung) | 知覚 | 対象が直接現れる直観的体験。想起や予期, 空想が対象を準現在化するのに対し, 知覚は対象を生身のありありとした仕方 で現在化する (『事典』pp.318f)。 |
| 準現在化 (Vergegenwärtigung)* | 知覚以外 | 現に今それと相対していないような対象を思い浮かべる作用 (『事典』p.285)。 |
| (定立的) 準現在化: 準現在化の中でも, 空想と異なり, 存在した・している・するだろうと確信を以て思い浮かべることが, 特に定立的準現在化。 | 予期 (将来想起) | たとえば明日予定されている会議の光景を思い浮かべる等 (『時間』pp.169ff)。 |
| | (再) 想起 | たとえば昨日のコンサートの情景を思い浮かべる等 (『事典』p.285)。 |
| | 現在想起 | 外から家の内部を思い浮かべる場合のように, 実際に知覚することなくして, 現在存在しているものとして思い浮かべる (『事典』p.285)。 |
| (非定立的) 準現在化: 準現在化の中でも, 空想のように, 実在の信念なく思い浮かべること。 | 空想 | 一角獣のような虚構の対象を思い浮かべる等 (『事典』pp.287f)。 |
| | 記号/像意識 | 読書等で文字のような記号を介して虚構の中に入り込む。/ 絵のある人の肖像として見る。画像であって実物でない以上, モデルの実在非実在にかかわらず非定立的 (『事典』pp.283f)。 |
| 現前化 (Präsentation) | 知覚 | 次項の向現前化に対比させて現在化を再定義した語。ほかならぬ私の知覚 (『事典』p.138)。 |
| 向現前化** (Appräsentation) | 他者経験 | 他者を他の主観として経験すること。他者の主観的経験を意識的無意識的に思い浮かべることも含まれる。定立的準現在化の一種であるが, 時間軸上で現在化することは決してない (『事典』p.138)。 |

* ドイツ語は元々「思い浮かべること」という意味。

** この訳語については本文参照。

*** 解説中の『事典』は『現象学事典』(木田ら, 1994)を, 『時間』は『内的時間意識の現象学』(Husserl, 2016/1966)を示すが, そのまの引用ではない。なお, 谷(1998)も参照した。

る。また, 向現前化という志向性の対象は, 他者の個別的な心的状態にとどまらず, 他者の視点から見られた体験世界全体である。フッサールは, ある主観の視点から見られた体験世界を「モノダ」と名づけている(木田ら, p.450)。向現前化の志向対象が**他の**モノダであるならば, 対比的に現前化の志向対象は, 私の視点から見られた私の体験世界全体, **この**モノダ, ということになる。なお, シュフィールド学派でも「生活世界」の前述の7条件が十全については議論があるように(Langdrige, 2016/2007, 第6章参照), 表1も本篇での主題分析にとっての十全性が保証されているわけではない。これについては「IV 結果2」で検討される。

III-2 分析対象となる15事例のリストアップ

全99事例から, 「他者になる夢」事例の計15例を抽出して年代逆順に表2にまとめた。ここで「他者」とは「筆者(渡辺恒夫)であるこの私以外の存在」であって, 人形や動物や虚構の存在であってもよい。ただし, 「自分は渡辺恒夫である」という自覚を維持したままカラスや人形になるのは, 「他者への変身」というより「自己の変貌」というべきではないか, という疑問が起きるが, そのような曖昧例も含めておき, 分析過程で「他者」の意味をより明確にすべく試みることにした(ちなみに, 「他者」の意味が明確にならなければ事例の抽出ができないう事例の分析が進まない他者の意味も明確にならないといった種類の, 標

表2 分析対象となる15事例

| 事例番号 | 記録年 / 月 / 日 | 他の誰かになる夢としての特徴 |
|------|-------------|--|
| ① | 2015/11/7 | 異性として観察者視点で場面を見ていたような。 |
| ② | 2015/2/26 | 同僚の K 教授の宇宙人エージェントらしい行動を見ているうちに K 教授になった。 |
| ③ | 2011/5/15 | 聞き知らぬ名の飛翔人として生きていた。 |
| ④ | 2011/2/18 | 別人としてアパートに住んでいた。 |
| ⑤ | 2011/2/8 | 江戸時代の誰かとして生きると共に、夢の物語進行を鑑賞。 |
| ⑥ | 2010/10/16 | 飛翔人になっていた。 |
| ⑦ | 2009/10/27 | 太平洋戦争の話を聞いていて話の中に入り込む。 |
| ⑧ | 2009/8/7 | 最初男性。途中で小説のように客観視。さらに相手の女性になる。 |
| ⑨ | 2009/7/7 | 寝ていると女性編集者が来訪し、私は K 元長官に変身する。最後に第三者的視点でも眺める。 |
| ⑩ | 2008/8/21 | フロイトとユングについての論文を書いていると実際に二人が登場し、そのうちユングになる。 |
| ⑪ | 2007/10/3 | 死んでカラスに生まれ変わって物語中に闖入。 |
| ⑫ | 2004/10/24 | 他人の人生の一齣を覗き込んだような。 |
| ⑬ | 2007/8/17 | 飛んで飛行機械に変身するも最後は他者として見る視点へ転換。 |
| ⑭ | 2007/1/2 | 相手の話に出てくる人形が自分だと最後に自覚しカムフラウト。 |
| ⑮ | 1977/11/13 | 名探偵金田一耕助になって新幹線に乗っていた。 |

本抽出上の循環事態を、渡辺（2009, p.98）は「解釈学的循環」（Gadamer, 2000/1959 参照）の一種として積極的に捉え直している。

III-3 出発事例の分析

全15例は、どのような順序で分析を行っても同じ結果に達すると思われるが、ここではI-1の見本事例を手掛かりに出発事例を定める。まず「いつのまにか」ベジータになっていたことから、「いつのまにか」他者になるという変身道筋の例を探し、その中からさらに、本稿の問題設定からして虚構他者より実在他者の方が関心事なので、「いつのまにか実在他者になっていた」事例を探す。表2リスト中、そのような例に当てはまると思われるのは事例⑨のみなので、これを出発事例とする（なお本稿で「実在の他者」とは、「実在する・した・と私によって確信されている他者」のことを意味する。歴史上の人物であっても実在してい

たことが確信されている限り、実在他者に分類される）。

表3として、左欄（段階Ⅰ）に事例⑨のテキストを意味的に分節して示した。これは記述的現象学（Giorgi, 2013/2009）の方法一般に準じたものである。次に段階Ⅱの欄に、I欄のテキストの関連部分に**あ**ても**現実世界で起こったかのように**想像的変更を施し、「現実テキスト」を作成して書き込む。その際、現実には起こり得ない出来事は起こり得るように変更する。段階Ⅲでは、「夢テキスト」と「現実テキスト」を比較し、表1の志向性表に基づき両者の相違を抽出するという主題分析を行う。

表3を解説すると、まず左欄（段階Ⅰ）の1)の場面は現実世界で生じたとしても不思議ではなく、想像的変更によって「現実テキスト」を作る必要はない。2)の場面では私はK元長官になってしまっている。これの現実テキストを作成して中欄（段階Ⅱ）に記入すると、「『……』と想像した」という鍵括弧付きのテキストとなる。表1の志向性表を元に主題分析を

表3 事例⑨の現象学的分析進行表

| 段階Ⅰ 意味的に分節した事例テキスト | 段階Ⅱ 夢テキストから想像的変更によって生成した現実テキスト | 段階Ⅲ 主題分析によるⅠとⅡの比較 |
|--|--|--|
| 1) ……突然、外から知り合いの女性編集者が訪問してきた。…… | (現実可能なことなので想像的変更は基本的に必要なし) | (比較なし) |
| 2) ここで、どうやら私は……「K元長官」になってしまっていたらしい。K元長官として、以前も小鳥の餌を食べているところを、別の女性編集者に見られて笑われたことを思い出した。 | 「K元長官になってしまった。K元長官として、以前も……見られて笑われたことを思い出した」と想像した。 | 現実世界での向現前化対象のK元長官が、夢世界ではいつのまにか現前化対象になっている。 |
| 3) 思い出しながら、別人の客観的視点でK元長官を見て、いかにも日本ユング派らしい、などと、解説するように考えていた…… | 「私はK元長官である」と空想しつつ、同時に客観的視点で「日本ユング派らしい」などと解説するように考えていた。 | 現実世界では向現前化対象のK元長官が、夢世界でも向現前化対象に部分的に戻った。 |

段階Ⅰの完全版テキストはウェブサイト参照(以下同様)。
 段階Ⅲの太字は観取された本質にかかわる部分(以下同様)。

行った結果が、右欄(段階Ⅲ)に記入されている。実在の他者であり向現前化対象であるK元長官が、夢世界では自己として主観的に経験されている。これは、K元長官が現前化している状態である。その後、K元長官を実在の他者として眺めるという視点転換に至るが、転換は完全でなく、同時にK元長官であり続けているようでもあった。右欄に記入した文章の太字部分をまとめれば、「この夢では、最初は夢主と視点が一貫していたが、途中でいつのまにか実在他者のK元長官が現前化し、最後に夢主としての視点へ部分的に戻り、K元長官も視点対象としての向現前化対象に戻る」となる。これが、事例⑨の「夢で他者になる」ということの、現象学的構造(=観取された本質)ということになる。

Ⅲ-4 全事例の分析

次に表2の全事例に対し表3と同様の方法で分析する。そして、出発事例⑨から始めて諸事例の分析結果を共通性と差異性を手掛かりに相互比較し(=普遍化・精緻化)、全事例の適切な分類に達することを以て、他者になる夢の全体像としたい。比較の順序としては、類似性が明らかな事例から比較を始めて似ていない事例に至る「拡散法」か、その反対の「収束法」という2方向が考えられる。ここでは最初拡散法を取

るが、途中、分析困難な曖昧事例に逢着した場合は収束法に移る。このようにサンドイッチ状に接近することで、曖昧事例をあぶり出しやすくなる。

まず拡散法から始める。同時代的実在他者への変身という点で出発事例⑨と類似の事例②を取り上げ、分析して表4とする。

事例⑨とこの事例②には、向現前化対象としての他者が現前化対象になるという共通項があるが、他者への変身の道筋に違いがある。前者では向現前化対象がいつのまにか現前化していたことが事後的に分かるのに対し、後者では場面中の向現前化対象が直接に現前化対象となる。他者変身を表1の志向性概念で表現すれば「向現前化対象としての他者が現前化する」となり、後者の方がこの命題により忠実なタイプの他者変身という意味で「典型的」と思われるので、これをA型変身と名づけ前者をB型変身と呼ぼう。なお、この分類は「実在他者」への変身例に基づいてなされたが、実在と虚構を問わず変身道筋の分類と見なすことができる。以後、事例比較はA型変身のルートとB型変身のそれとに、分岐することになる。なお以下の分析では紙面の都合で表の掲載を大幅に省略するが、全事例について作表しておくことが方法の基本である。

(1) A型変身(変身道筋の第一のタイプ)

A型変身から始める。このタイプの候補として事例

表4 事例②の現象学的分析進行表

| 段階Ⅰ 意味的に分節した事例テキスト | 段階Ⅱ 夢テキストから想像的変更によって生成した現実テキスト | 段階Ⅲ 主題分析によるⅠとⅡの比較 |
|--|---------------------------------------|---|
| 1) 大学のキャンパスにいた。騒然としていて…… どうやら、学生の蜂起が間近いらしかった。 | (想像的変更は基本的に必要なし) | (比較なし) |
| 2) 同時に、宇宙人の侵略が進行中だった。…… | 「宇宙人の侵略が進行中だ」と想像した。 | 現実(中欄)での憶測ないし空想という「準現在化」の対象が夢(左欄)では現在化され確信となっている。 |
| 3) キャンパスの中にF教授〔T大学での同僚〕の姿があった。 | (想像的変更は基本的に必要なし) | (比較なし) |
| 4) F教授は、地球人に姿を変えた宇宙人エージェントの一人らしい。事務職員らしき男に出会うと、その額に手を当てる。しばらくすると職員は、「……鍵を開けておく」といったことを呟いた。 | 「F教授は、地球人に姿を変えた宇宙人エージェントの一人らしい」と想像した。 | 現実での憶測ないし空想という「準現在化」の対象が夢では現在化され確信となっている。 |
| 5) そのうち、私はF教授になっていたようだった。 ／F教授の姿で宇宙人エージェントとしてキャンパスの建物の間を行くと、学生運動家の集団が来た……隠れてやりすごした。…… | 私は、「それまで見ていたF教授になった」と想像した。 | それまで向現前化対象として見ていたF教授が現前化した。 |

段階Ⅰの〔 〕は本稿での補足。

⑤, ⑦, ⑧, ⑩があげられる。実在人物の登場という意味で上述の事例②に類似の⑩を分析する。分析進行表の掲載は省略するが、「(1) 夢の中で、ベートーヴェンの作品についてフロイトとユングが説を立てている、といった論文を書いていた、(2) 両者が直接話し合う場面が出てきた、(3) そのうち私はユングになっていた」という三つの部分からなる夢である。表1に基づく主題分析の結果、(1) から (2) への推移は、「現実世界での記号意識という準現在化を通じての間接的な向現前化対象が夢世界で現在化した」、(2) から (3) への推移は「夢世界で現在化していた向現前化対象が、さらに現前化した」となった。これをさらにまとめると、「現実世界での記号意識という準現在化を通じての間接的な向現前化対象が、夢世界で現在化して直接の向現前化対象となり、さらに現前化することで私は実在他者に変身した」が、事例⑩の観取された本質ということになる。この例で、「実在他者」の範囲が直接の知人から歴史上の人物まで拡大したことは、実在の他者と虚構の他者の境界が曖昧となり得ることを予感させる。A型変身夢の中での事例⑤, ⑦,

⑧はその例であるが、曖昧例に逢着したところでB型変身の考察に移ろう。

(2) B型変身(変身道筋の第二のタイプ)

B型変身に入れられる候補は事例⑨の他は事例⑪, ⑬, ⑭と思われるが、構造が事例⑨に類似している事例⑬を分析する。表は省略するが、「プラットホームに立って」いた「私」は竹とんぼのような飛行機械となって飛んでゆき、ゴジラに遭遇する。「ブンブン飛び回る竹とんぼ機械の私は、いまや、客観的に他者となって、ゴジラの体を分析しているのだ……竹とんぼ様の飛行物体が、どうやらそのオキシ**ライザー〔対ゴジラ秘密兵器〕らしかった」。そこで目が覚める。つまり、事例⑨と同様のB型変身といっても、実在でなく虚構存在である飛行機械に変身している。しかし事例⑨と同じく最後に視点転換することで、飛行機械が向現前化対象となり、今まで(ロボットめいた飛行機械という)他者へ変身していたのだという解釈を保証している。しかしこのような視点転換がなく、カラスや人形に変身しっぱなしの⑪や⑭は、他者

への変身というより自己の変貌というべきであり、分析リストから外した方がよいと分かって来る。つまり、III-2で投げかけられた「他者」の定義への疑問に対して、最初の答えが得られたのである。本稿での他者とは、「夢テキスト中で、一度は視点の主体でなく対象となった『渡辺恒夫』以外の存在である」。

(3) C型変身(変身の第三のタイプ)と「他者」の新たな定義

ここで、A型でもB型でもない事例①, ③, ④, ⑥, ⑫, ⑮を見ると、共通の特徴が浮かび上がって来る。A型のような他者への変身による視点転換も、B型のような変身の解除による視点転換もなく、最初から最後まで他者として生きているのである。このタイプをC型変身と名づけよう。すると、つい先ほど下した他者の定義からして、一度も視点対象になっていないのに他者と呼べるのかという疑問が湧こう。次の事例も、そのような「渡辺恒夫」ではないという自覚が一貫して維持されている例である(C型変身事例からの選択は、「収束法」により、今まで考察してきた実在他者とは最も差異が明瞭な虚構他者の例をあげた)。

表5のように、夢世界の私は、終始一貫して横溝正史の作中人物である名探偵金田一耕助としての自覚を維持しているようである。他に、事例①は異性として、③と⑥も「飛翔人」という虚構の存在として、それぞれ一貫しているので同様のカテゴリーに入る。ところが④や⑫になると微妙になる。「別人」であることがなぜ分かるだけで他に手掛かりがなく、まったくの

架空存在なのか、群衆の中から任意の一人を選び出す場合のような匿名の実在性があるのかが不明である。このように、純粹の虚構性と匿名の実在性の間に位置づけられる例を、「虚実不明他者」として一括するが、これらの例も一貫して「渡辺恒夫」以外の存在という自覚を維持しているようである以上、やはり他者変身夢のカテゴリーに入れることは可能であろう。ここで、前項(2)で得られた「他者」の定義を改訂することが必要になってくる。すなわち、本稿の夢事例での他者とは、「一度でも外側から『渡辺恒夫』以外の存在として視点を向けられるか、もしくは、『渡辺恒夫』以外の存在という自覚を一貫して維持していると思われる登場人物である」。

III-5 全事例の分類表の作成

ここで分類を表6としてまとめるが、数多くの曖昧事例の出現のため「虚実不明他者」の欄が必要となった。前述した以外に、A型変身に属する⑤, ⑦, ⑧もこの欄に入れた。この表にはまた数個の空欄がある。これらの空欄に相当する夢はありえないということだろうか。この点を確認するため、他欄の実際の夢事例を想像的に自由変更することで、空欄にふさわしい架空の夢事例を作成してみよう。まず、「虚構他者・A型変身」の欄の*1には、事例⑮に想像的変更を施して当てる。表5左欄の冒頭「私は名探偵金田一耕助になって新幹線に乗っていた……」は、「私は新幹線の中で名探偵金田一耕助がいるのに気づいた。見ている

表5 事例⑮の現象学的分析進行表

| 段階Ⅰ 意味的に分節した事例テキスト | 段階Ⅱ 夢テキストから想像的変更によって生成した現実テキスト | 段階Ⅲ 主題分析によるⅠとⅡの比較 |
|---|-------------------------------------|-------------------------|
| 1) 私は名探偵金田一耕助になって新幹線に乗っていた。岡山から伯備線に乗り換え、鳥取県境に近いとある小駅で降りる予定であった。……私を必要とする事件が発生する、という予感がしたのだった。 | 私は、「名探偵金田一耕助になって新幹線に乗っていた。……」と想像した。 | 架空の他者という準現在化対象が現在化している。 |
| 2-3) 2段落分省略 | | 1) と同じ。 |
| 4) 阪神間のどこかの駅にまちがって降りてしまったのだとわかった。／……私は途方に暮れて宵闇の迫るホームに立ち尽くしている。 | 私は「名探偵金田一耕助としてまちがった駅に降りてしまった」と想像した。 | 1) と同じ。 |

うちに金田一耕助になってしまった……」といったような展開になるだろう。次に「実在他者・C型変身」の欄の*2には、事例⑨を想像的に変更して当てよう。表3の行2) からいきなり夢が始まって行3) に入る前に終わったと想定すると、「私は『K元長官』だった。K元長官として、以前も小鳥の餌を食べているところを、別の女性編集者に見られて笑われたことを思い出したところで目が覚めた」というように想像的変更ができるだろう。空欄*3も、⑨における実在他者である「K元長官」を、「誰か分からぬ学者」(=虚実不明他者)というように想像的に変更すれば、埋めることができる。こうして空欄を埋めるべく人為的に作られた夢事例であるが、夢として決して不自然ではなく、本稿で用いたデータソース以外を探せば容易に見つかっても不思議でないと感じられる。つまり、表6に空欄があるのは単なる偶然であり、表6で枠組みが提供された他者になる夢の全体像は、本研究に限定されたものでなく、私たちの見る他者変身夢の一般的特徴の全体像である可能性がある。

IV 結果2——現象学的解明

次に「なぜ他者変身が可能なのか」という解明に移るが、表6の事例すべてを顧慮する必要はないと思われる(曖昧事例も無視して差し支えないだろう)。III-4 (1) で述べたように他者変身夢としてはA型

変身がより「典型的」である。ゆえにその「実在他者」の例として、表4にもなっている事例②を取り上げる。これに対し、「虚構他者」のA型変身の欄を表6で見ると空欄になっている。このように最適のデータがない場合は、次善の策を用いることになる。すなわち、*1「私は新幹線の中で名探偵金田一耕助がいるのに気づいた。見ているうちに、金田一耕助になってしまった……」という架空の事例を用いることとする。ただし、架空事例であることは事実なので、その元になった事例⑮をも参照し、どちらを用いても同様な解明結果が出ることを確認する必要がある。

IV-1 現象学的解明——虚構他者の場合

まず、虚構他者の場合から始める。表6での「架空事例*1」の夢テキストを現実世界テキストへと想像的に変更すると、〈現実〉「新幹線の中で『私は名探偵金田一耕助がいるのに気づいた。見ているうちに、金田一耕助になってしまった』と私は想像した」となる。これを逆向きに辿ると、〈夢〉「新幹線の中で私は名探偵金田一耕助がいるのに気づいた。見ているうちに、金田一耕助になってしまった」となる。想像的変更を逆向きに辿ることで、二重の括弧が一重になるという構造変容が夢で生じていることが分かる。つまり、覚醒時の想像には「と私は想像している」という覚知が伴うが、夢では消滅する⁶⁾。現実世界での現象学的構造の二重性が、夢世界では一重になるのである。したがって、「なぜ夢の中で他者変身できるのか」の問

表6 主題分析の結果による全事例の分類

| 変身の道筋 | 他者の種類 | | |
|-----------------------------------|---------------------------------------|---------|------------------------|
| | 実在他者 | 虚実不明他者 | 虚構他者 |
| A型変身 視点転換によって他者になる。 | ②(向現前化対象の現前化), ⑩(記号意識を介しての向現前化対象の現前化) | ⑤, ⑦, ⑧ | *1 |
| B型変身 視点転換によらず他者になり、後で視点転換して自己に戻る。 | ⑨(向現前化対象の現前化) | *3 | ⑬(準現在化対象の現在化) |
| C型変身 視点転換なし。一貫して他の誰か。 | *2 | ④, ⑫ | ①, ③, ⑥, ⑮: 準現在化対象の現在化 |

①, ②などの表記は表2での事例番号。

いは、虚構他者の場合、次のように解明できるだろう（構造を明確にするため、〈現実テキスト〉を二成分に分けた）。

〈現実〉「私は実在しない『金田一耕助がいるのを見ているうちに、金田一耕助になった』と想像する (1)。『実在しない金田一耕助になっていると想像しているに過ぎない』ことを私は知っている (2)」。ところが夢では、この、現実の現象学的二重構造の (2) の部分が消滅し、(1) だけの一重構造になるため、〈夢〉「金田一耕助がいるのを見ているうちに、金田一耕助になった」。

この事態を表7の上段に記しておこう。また、表1の用語を用いれば、準現在化事態（実在しない金田一耕助になったという空想）が現在化した（金田一耕助になった）、と表現できる。なお、この分析はすでに述べたように架空事例に基づいているが、実際の事例⑤に基づいても、「実在しない『金田一耕助になって新幹線に乗っていた。……』と私は想像する」+「……と想像しているに過ぎないことを私は知っている」⇒「金田一耕助になって新幹線に乗っていた」と、同様に解明できることが確かめられる。

IV-2 実在他者の場合

実在他者への変身夢の例としては事例②を取り上げた。表4での想像的変更を逆向きに辿ると、〈現実〉「私は、実在する『F教授を見ているうちに、F教授になった』と想像した。」⇒〈夢〉「私は、F教授を見て

いるうちに、F教授になった」となる（表1の用語を用いると、向前化対象が夢で現前化した、となる）。ところが、ここで現実テキストでの「想像した」とは、虚構他者の場合とは全く異なる、はるかに複雑な事態である。これを、表7の下段右欄にまとめておいた。

表で示されているように、虚構他者への準現在化と実在他者への向現前化の違いは、前者では私は、当該の他者が**実在しない**ことを知っているのに、後者ではそれが**実在する**ことを知っているところにある。ところが、虚構他者の場合に倣って想像的変更を逆向きに辿ると、中欄（夢テキスト）のように同様にシンプルなものになってしまい、現実世界での両者の現象学的構造の違いが全く反映されないことになる。現に、夢世界で生じていることは、まさにこのことなのである。

けれども、これはやはり奇妙なことではないだろうか。虚構他者への準現在化の場合、意識は二重である。ところが実在他者への向現前化的変身想像とは、表に整理して示したように、三重意識として構造化される。「F教授になっている」という想像意識、「それが想像に過ぎない」という志向的意識、そしてこの二重意識以外に、「私が想像したF教授の内面以外に、実在のF教授の内面が世界のどこかに実在する」という確信意識が存在するのである⁷⁾。ところがこの確信意識が夢では行方不明になってしまい、その結果、三重の志向的構造が一挙に一重になってしまっている。このような夢での変容についてはドウ・ウォレン（2009）にも手掛かりがないし、III-1でも触れたように表1の主題分析にとっての十全性が最初から保証されているわけ

表7 想像的変更を逆向きに辿ることによる解明

| 他者の種類 | 夢テキスト | 現実へ想像的変更されたテキスト |
|-------|---------------------------------|--|
| | 現在化 ←—————→ 準現在化 | |
| 虚構他者 | 1) 金田一耕助がいるのを見ているうちに、金田一耕助になった。 | 1) 実在しない「金田一耕助がいるのを見ているうちに、金田一耕助になった」と想像した。 2) 「……と想像しているに過ぎないこと」を私は知っている。 |
| | 現前化 ←—————→ 向現前化 | |
| 実在他者 | 1) F教授がいるのを見ているうちに、F教授になった。 | 1) 実在する「F教授がいるのを見ているうちに、F教授になった」と想像した。 2) 「……と想像しているに過ぎないこと」を私は知っている。 3) 私になっていると想像しているF教授とは独立に、F教授は実在することを、私は知っている。 |

ではない以上、表1の改訂を目指すこともありえよう。そのために、フッサールの他者論を批判的に再構成したヘルト (Held, 1986/1972) の所説に手掛かりを求めるところにする。

IV-3 ヘルトによるフッサール他者論の 批判的再構成

『デカルト的省察』(Husserl, 2015a/1950) で間主観性論の名で展開されているフッサールの他者論によると、他者理解の過程は幾つかの段階に分かれる。まず、私は自己の身体を〈絶対のここ〉に位置づけられる特別な対象として経験している。私の体験する世界は、〈絶対のここ〉を中心としてひらかれる「モノド」なのである。そこに、自己の身体と似た物体が出現することで「対化」が起こり、「類比化的統覚」という一種の統覚の働きによって、対側の物体も、〈他の絶対のここ〉が位置する身体という意味を獲得する。これは、「そこにある物体」をもう一つの〈絶対のここ〉としてひらかれる「他のモノド」が成立するということである。自我と他我の関係は、モノド同士の関係ということになり、他のモノドが存在するという確信が、他者理解ということになる (谷, 1998; 渡辺, 2013

等による解説を参照)。ところがこのフッサールの他者論に対し、ヘルト (1986/1972) は、フッサールの遺稿を検討することによって批判的に再構成するという、「内在的批判」を行っている (pp.178ff)。その概要を表8に記した。

ここでいう二種類の意識の働きは、表1に照らせば「二種類の異質の準現在化」として一步踏み込んで特徴づけることができるだろう。また、「類比化的統覚」の代わりに表1にある「向現前化」の語を使えば、次のようにより分かりやすくまとめられることになる。

——フッサールのいう向現前化は、二つの異質な作用の協働からなる。第一に、私があたかもそこにいるかのように、つまり「そこにある他者という物体」であるかのように想像することである。けれども私はこの想像が虚構であることを知っているの、そこにいる他者の実在確信は生じない。そこでフッサールは、自我の時間化としての他者という一見不可解な想定に訴える。つまり「過去または未来にそこにいる私自身であるかのように他者は実在する」という想定をし、これら二種類の志向性の協働によって他者の実在確信が成立するとした。つまり、フッサールの向現前化とは、二種の異質の準現在化の協働を意味することになる。虚構対象への(非定立的)準現在化と、想起・予

表8 ヘルトによるフッサール他者論の内在的批判

フッサールは異質の二種類の意識の働きの協働によって、類比化的統覚が成立している。なぜなら、「ちょうど私がそこにいる時のように (wie wenn ich dort wäre) そこから現象的世界がひらけ、その中心としての身体を〈ここ〉とする〈他の私 (他我)〉が……」というように、フッサールは『デカルト的省察』(Husserl, 1950 (原著), p.148) の中でこの類比化的統覚を表現しているが、この(ヘルトによって)太字で強調された部分の文は、二重の意味を持つからだ。

- ①「あたかもそこにいる他者の身体をこことして世界が開けているかのように私は想像する」という虚構的意識 (= 空想)。この意識は、「あたかも私がそこにいるかのように」(als ob ich dort wäre) という言い方で表されるであろう。けれども私はそれが虚構であることを知っている。
- ②「私がここにいるのと同時ではない過去か未来かに、私はそこ (他者の身体) にいることができる」という時間的想定。この想定は、「私がそこにいるならば」(wenn ich dort bin) という定式で言い表されるであろう。

『デカルト的省察』では二種類の意識は区別されていないが、この二種類の意識の働きの協働によって他者の身体の類比化的統覚が成立するのでなければならぬと、フッサールは多かれ少なかれ明確に遺稿で述べている。けれども、これら二種の意識の働きは全く異質なので、いくら協働しても、目の前の他者の身体を「ここ」とするモノドが開けるといふ確信は形成されないのではないか。

要約にあたって渡辺 (2016b, p.136) を参照した。

期といった（定立的な）時間的準現在化と。

IV-4 表1の改訂と、他者になる夢の現象学的
解明の遂行

表1の最下段を上述のヘルトの批判的解釈に従って改訂したのが、表9である。これで、〈現前化／向現前化〉という他とは異質的な対概念が、〈現在化／準現在化〉というより分かりやすい対概念へと還元できたとも考えられる。

するとどうということになるのか。I-2 (1) で見たように、夢世界では、想起・予期など時間的準現在化も、虚構存在の想像という準現在化も、ことごとく現在化し、「知覚」となるというのが、フッサー現象学から本研究で取り出した基本着想だった。さて、ヘルトのフッサー解釈によると、向現前化という志向作用は、虚構的準現在化と時間的準現在化という二種の準現在化の協働からなるのだった。ところが夢世界では、この両者の準現在化は、共に現在化するのである。結果として、向現前化もまた現在化してしまわないだろうか。ゆえに夢世界では私は、実在他者へも虚構他者へも、区別なく変身できるのではないだろうか。

すなわち、実在他者になる夢の現象学的解明としては、IV-1の虚構他者の場合に倣って、以下のようにいうことができるように思われる。

現実で私は、(1) 実在する「F教授がいるのを見ているうちに、F教授になった」と想像した。(2) 「F教授になったと想像している」に過ぎないことを私は知っている。(3) 私がなっていると想像しているF教授とは独立にF教授は実在することを、私は知っている。ところがF教授が実在するという(3)の確信が、時間的準現在化と虚構的準現在化の二種の準現在化の協働からなる以上、夢ではこれらの準現在化が共に現

在化し知覚となるため、三重の志向作用は一挙に一重化し、かくして私は「F教授になった」。解明終わり。

V 総合的考察と展望

V-1 フッサー他者論批判について

個別事象を、現実世界と夢世界の基底な構造の違いに還元することで「なぜ」の問いに答えるのが、現象学的解明である。ところが、架空ではない実在の他者への変身夢については、表7に見るように二重どころか三重の志向的意識が一挙に一重になるとして、解明を行ったのだった。そのために、表7中実在他者の行の右欄にある「3」F教授の実在への確信」を、ヘルトによるフッサー説の批判的再構成に従って、二種類の準現在化の協働からなると思なしたのだった。ここには問題はないだろうか。表8に引いたように、ヘルトによれば、二種の準現在化の協働によっては他者の実在の確信は形成されないはずだというのである。ヘルト以外にも、このフッサーの他者論への批判は少なくない（たとえば広松, 1994）。けれども筆者は、「①時間的準現在化と虚構的準現在化の二種の準現在化の組み合わせという協働作業の例が他にない以上、この協働作業によって他者の実在の確信が生じないということを確認するべきがない」、「②他者の実在の確信が、眼の前の花瓶の背面の実在への確信に比べてもそれほど強固で安定したものではないことは、まさに他者の実在への確信の亀裂である独我論的体験についての調査研究（渡辺, 2009, 2013）によって示唆されている」、以上2つの理由によって、ヘルトによって批判的に再構成されたフッサー他者論を、批判的でなく

表9 表1の最下段の改訂

| 志向性の種類 | 意識の様相 | 解説 |
|-----------------------------------|-----------------------|---|
| 向現前化 =「非定立的準現在化」 ×「定立的準現在化」 | 他者経験 =「空想」×「想起・予期」 | 自分がその他者であるという空想と、いつかその他者であるという時間軸上の準現在化の協働作業が他者経験(Held, 1986/1972)。 |

「×」は協働を表す。

受け入れることは可能であると考え。何よりもそれによって、実在と虚構とを問わず夢世界では他者への変身が可能となることが、解明できるのだから。

V-2 結論と展望

本稿はフッサール直系ともいべき現象学的研究であるが、質的心理学研究へと展開すべく次のような技法上の工夫を試みた。①インターネット上に公開されたデータを用い、標本抽出の段階から誰にでも追試可能とした。②ジオルジ(2013/2009)に学び現象学的分析の段階進行表を用いた。③シェフィールド学派に示唆を受けてテキスト分析にあたって主題分析の方法によったが、主題としてはフッサールの志向性の分類を用いた。④夢と現実とを比較可能とするために想像的変更の方法によって「夢テキスト」から「現実テキスト」を生成して主題分析を行った。⑤他者変身事例全例の共通項と差異項に着目する分析によって適切な分類に達し、これによって他者変身夢の全貌がほぼ明らかになった。ただし、分類といっても空白欄を架空事例で埋めているので、今後は別のデータ群を用いて分類の適切性を確認していく必要がある。

次に、「なぜ変身できるか」に答えるべく「解明」の段階に移った。⑥すでに分類済みの事例中から、解明に適切と思われる二例(それぞれ虚構他者へと実在他者への変身夢)を選び出し、解明を試みた。解明は、④で生成された現実テキストの現象学的構造から夢テキストの現象学的構造へと逆向きに辿り、両者の構造の違いを明確化することによってなされた。⑦虚構他者の場合、二重の志向的意識が一重化することによる準現在化対象の現在化として、解明がなされた。⑧ところが実在他者の場合、三重の志向的意識が一重化することとして解明されてしまった。これは一見不可解なので、実在他者への志向的意識である向現前化は実は二種類の準現在化の協働から生じるという、ヘルトによるフッサール他者論の批判的再構成によって、主題分析に用いるフッサールの志向性分類を改訂した上で、⑨この改訂版に基づき、実在他者の場合の他者になる夢を解明した。

この⑧の過程は主題分析に用いたフッサールの志向性論自体の哲学的検討が中心になっており、心理学

研究としては十分に展開されてはいないといわれるかもしれない。が、本稿が参考にしたシェフィールド学派の生活世界の7主題にしても、その抽出自体は哲学的考察に基づくのである。現象学的心理学が「現象学的哲学に基づく、あるいはそれに示唆を得た」(Langdrige, 2016/2007, p.2)心理学である以上、哲学への遡及は避けがたいことである。むしろ、事例の抽出と現象の定義の間に解釈学的循環があったように(III-2参照)、主題の抽出と主題分析の結果の間にも解釈学的循環があり、このような循環自体が質的心理学研究にとって契機をなすということこそ、自覚されねばならないだろう。

本研究の意義を振り返ると、まず方法論的には、本稿での現象学的解明の方法は、夢だけではなく、木村(1973)の例に見られるような精神病理的な他者変身にも、さらには精神分析的な無意識的同一化の機軸の解明にも、応用が可能かもしれない。「そもそもなぜ同一化が可能か」の問いに対しては、夢の場合と同様、(無意識を現象学的に探究することの困難は措くとして)「無意識」における志向的構造の変容に遡っての解明がありえるかもしれないからである。

次に、「なぜ夢では他者になることが可能なのか」の問い自体の意義を、この問いの解明を通じて振り返ろう。まず、他者経験における「向現前化」を二種の「準現在化」の協働とするという、ヘルトによるフッサール他者論の改訂に基づいて実在他者への変身夢を解明したことは、本稿冒頭で述べた、他者になれないことを必須の契機とする自己の自明性だけでなく、同様の他者経験の自明性も問題化する途を拓いたといえよう。他者経験とはそれ以上の分析を許さないアプリオリな直観のようなものではなく、複数の志向性による構成であることになり、当然、何かのきっかけで他者の自明性には亀裂が入ることもありえることになるからである。すでに言及した独我論の体験は、精神病理学的体験にも正常な発達過程の途上で生じることがある体験にも、共々他者の自明性が破れる体験があることに着目して名づけられたものであるが(渡辺, 2009)、これらの体験の解明にも途が拓かれる可能性があろう。

注

- 1) 引用文中や引用事例中の「/」は原文での改行を、「…」は引用での省略を示す。以下同様とする。
- 2) 1996年度収集の夢報告に基づく。報告を求めるにあたって、①報告は匿名化した上で学術目的に限って論文等に引用することがあること、②いかなる引用も希望しない場合はその旨明記すること、③夢を見なかった場合や夢報告自体を欲しない場合は夢についての文献などを参照しての一般的考察で以て替えることができること、という三点を事前に板書して説明した。ただし、ここで実際の報告を引用する必要があるわけではないので、実際の夢報告をもとにしてその体験構造だけを保持し、状況や登場人物などは変えた架空の事例とした。
- 3) ジョルジ (2013/2009) は、一人称で書かれたテキストをも分析進行表の中で三人称に変換するという技法を、現象学的分析の科学性・客観性の保証のためとして推奨しているが、現象学的分析一般の技法としてはいざ知らず、夢分析には適さない技法である。「結果」で具体的事例に即して見るように、視点変換が問題になる夢が多いのに、わざわざ一人称を三人称に変換していたら混乱の源になってしまいかねないだろう (渡辺, 2014, 参照)。
- 4) 現象学的に「解明する」(Aufklären) ことが科学的な「説明する」(Erklären) ことと異なることについては、フッサール (1965/1950), p.15訳註** に説明がある。「解明する」の英訳としては、clarify が用いられる (Husserl, 1960/1950)。なお、自然科学の方法を「説明」(explanation) とし、人間科学独自の方法を「理解」(understanding) とするという立場 (丸山, 1985; von Wright, 1984/1971参照) を取るとして、本研究での「解明」と三者比較をすると、以下のようになる。**説明**: 個別事象を一般法則に包摂すること。これによって過去へ向かつては「原因による説明」が、未来へ向かつては「予測」が、可能になる。**理解**: 「理由」によって、たとえば「彼女が窓を開けたのは部屋が蒸し暑いからだ」と説明することは、理由による説明が原因による説明と異なることは、例文が「彼女は部屋の蒸し暑さを減じる〈ために〉窓を開けた」と、目的論的説明に変換可能なことから分かる。**解明**: 個別的現象を、現象のより基底的・普遍的な構造に還元して理解すること。たとえば「なぜベジータに変身すると想像しても現実には不可能なのに夢の中では変身できるのか」という問いに対し、現実世界と夢世界での、志向的意識の構造上の差異に還元して答えること。
- 5) Appräsentation は、Ad (に向かって) + Präsentation の

- 意であり、『現象学事典』(木田ら, 1994) では「付帯現前化」(pp.138-139) と訳されている外、『デカルト的省察』の船橋訳 (Husserl, 2015a/1950) では「間接呈示」、浜渦訳 (Husserl, 2001/1977) では「共現前」と訳されているが、本研究では「向現前化」と訳した。その方が日本語の語感として、他者の実在を確信して現前化に向かいながらも決して現前しないという、もどかしさが伝わると思うからである。
- 6) 想像的意識が二重の意識であることを示す現象学的心理学研究としては、白昼夢についての現象学的心理学研究に参加した協力者の一人の次の証言を引用しておく。「白昼夢が目の前にありありと浮かんでも、私はやはり『ああ、自分はこれを想像しているんだな』ということ、たとえ無自覚にはあっても心の隅で知っているのです」(Morley, 1998, p.128)。
 - 7) 両者の違いは次のようにも説明され得よう。實在人物のF教授が蚊にさされているのを見た場合に私はF教授の痒みを想像するが、他方、F教授の痒みには「正解」があるはずだとも確信している。ところが金田一耕助が蚊に刺された場合の痒みを想像しても、「正解」がないのである。

付記

データ元であるインターネット上の筆者の個人ウェブサイトのURLは、下記の通りである (掲載が決定した後に記載された)。

<http://fantastiquelabo.cocolog-nifty.com/>

また、本文中、筆者の実名が記されている箇所は、投稿時に「[筆者名]」と表記されていたものを、掲載決定後に直したものである。なお、本稿は、投稿時に参考論文として提出した渡辺 (2015) とデータが一部重複するが、規模、方法論的洗練度ともに格段の相違のある別論文であると認められている。

引用文献

- Ashworth, A., & Ashworth, P. (2003). The lifeworld as phenomenon and as research heuristic, exemplified by a study of the lifeworld of a person suffering Alzheimer's disease. *Journal of Phenomenological Psychology, 34*(2), 179-205.
- Ashworth, P. (2003). An approach to phenomenological psychology: The contingencies of the lifeworld. *Journal of Phenomenological Psychology, 34*(2), 145-156.
- ビンスワンガー, L. (2001) 夢と実存 (新装版) (荻

- 野恒一・中村昇・小須田健, 訳). みすず書房.
(Binswanger, L. (1947) *Traum und Existenz. Ausgewählte Vorträge und Aufsätze Bd. I*. Bern, Switzerland: Francke Verlag.)
- ボス, M. (1970) 夢——その現存在分析 (三好郁男・笠原嘉・藤縄昭, 訳). みすず書房. (Boss, M. (1953) *Der Traum und seine Auslegung*. Bern, Switzerland: Verlag Hans Huber.)
- カイヨワ, R. (1986) 夢の現象学 (金井裕, 訳). 思潮社.
(Caillois, R. (1956) *L'incertitude qui vient des rêves*. Paris: Gallimard.)
- ドゥ・ウォレン, N. (2009) 夢, 悪夢, そして自己覚知 (村田憲郎, 訳). 現代思想, 37(16), 90-101. (de Warren, N. (2009). *Dreams, nightmares and self-awareness*. Unpublished.)
- 土居健郎 (1967) 精神分析. 創元社.
- エリス, H. (1941) 夢の世界 (藤島昌平, 訳). 岩波書店 (岩波文庫). (Ellis, H. (1911). *The World of Dreams*. London: Constable.)
- Finlay, L. (2003). The intertwining of body, self and world: A phenomenological study of living with recently-diagnosed multiple sclerosis. *Journal of Phenomenological Psychology*, 34(2), 157-178.
- フロイト, S. (2007) フロイト全集4 夢解釈I (新宮一成, 訳). 岩波書店. (Freud, S. (1942) *Gesammelte Werke, II/III, Die Traumdeutung* (A. Freud, E. Bibring, W. Hoffer, E. Kris, & O. Isakower, Eds.). London: Imago Publishing.)
- フロイト, S. (2011) フロイト全集5 夢解釈II (新宮一成, 訳). 岩波書店. (Freud, S. (1942) *Gesammelte Werke, II/III, Die Traumdeutung* (A. Freud, E. Bibring, W. Hoffer, E. Kris, & O. Isakower, Eds.). London: Imago Publishing.)
- ガーダマー, H. G. (2000) 理解の循環について——哲学的解釈学 (竹市明弘, 訳). H. G. ガーダマー・K.-O. アーペルほか (著), 竹市明弘 (編) 哲学の変貌——現代ドイツ哲学 (pp.163-183). 岩波書店 (岩波モダンクラシックス). (Gadamer, H. G. (1959) *Vom Zirkel des Verstehens*. In *Martin Heidegger zum 70. Geburtstag: Festschrift*. Pfullingen, Germany: Günther Neske.)
- ジョルジ, A. (2013) 心理学における現象学的アプローチ——理論・歴史・方法・実践 (吉田章宏, 訳). 新曜社. (Giorgi, A. (2009). *The descriptive phenomenological method in psychology: A modified Husserlian approach*. Pittsburgh, PA: Duquesne University Press.)
- ハンソン, N. R. (1986) 科学的発見のパターン (村上陽一郎, 訳). 講談社 (講談社学術文庫). (Hanson, N. R. (1958) *The patterns of discovery: An inquiry into the conceptual foundations of science*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.)
- ヘルト, K. (1986) 相互主観性の問題と現象学的超越論的哲学の理念 (坂本満, 訳). H. ロムバッハ・P. リクール・L. ラントグレーベほか (著), 新田義弘・村田純一 (編), 現象学の展望 (pp.165-219). 国文社. (Held, K. (1972). *Das Problem der Intersubjektivität und die Idee einer phänomenologischen Transzendentalphilosophie*. In U. Claesges, & K. Held (Eds.), *Perspektiven transzendentalphänomenologischer Forschung* (pp.3-60). The Hague, Netherlands: Martinus Nijhoff.)
- エルヴェ・ド・サン＝ドニ侯爵 (2012) 夢の操縦法 (立木鷹志, 訳). 国書刊行会. (Hervey de Saint-Denys, M. d'. (1964) *Les rêves et les moyens de les diriger*. Paris: Tchou)
- 広松渉 (1994) フッサール現象学への視角. 青土社.
- Husserl, E. (1960) *Cartesian meditations: An introduction to phenomenology* (D. Cairns, Trans.). The Hague, Netherlands: Martinus Nijhoff. (Husserl, E. (1950). *Cartesianische meditationen*. In S. Strasser (Ed.), *Husserliana Bd. I*. The Hague, Netherlands: Martinus Nijhoff.)
- フッサール, E. (1965) 現象学の理念 (立松弘孝, 訳). みすず書房. (Husserl, E. (1950). *Die Idee der Phänomenologie: Fünf Vorlesungen*. In W. Biemel (Ed.), *Husserliana Bd. II*. The Hague, Netherlands: Martinus Nijhoff.)
- フッサール, E. (1995) ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学 (細谷恒夫・木田元, 訳). 中央公論社 (中公文庫). (Husserl, E. (1954). *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie*. In W. Biemel (Ed.), *Husserliana Bd. VI*. The Hague, Netherlands: Martinus Nijhoff.)
- フッサール, E. (2001) デカルト的省察 (浜渦辰二, 訳). 岩波書店 (岩波文庫). (Husserl, E. (1977) *Cartesianische Meditationen: Eine Einleitung in die Phänomenologie*. In E. Ströker (Ed.), *Philosophische Bibliothek, Bd. 291*. Hamburg, Germany: Felix Meiner.)
- フッサール, E. (2004) プリタニカ草稿 (谷徹, 訳). 筑摩書房 (ちくま学芸文庫). (Husserl, E. (1968) *Der Encyclopaedia Britannica artikel*. In W. Biemel (Ed.) *Husserliana Bd. IX*. The Hague, Netherlands: Martinus Nijhoff.)
- フッサール, E. (2015a) デカルト的省察 (船橋弘, 訳). 中央公論社 (中公クラシックス). (Husserl, E. (1950).

- Cartesianische Meditationen: Eine Einleitung in die Phänomenologie. In S. Strasser (Ed.), *Husserliana Bd. I*. The Hague, Netherlands: Martinus Nijhoff.)
- フッサール, E. (2015b) 間主観性の現象学Ⅲ——その行方 (浜渦辰二・山口一郎, 監訳) 筑摩書房 (ちくま学芸文庫).
- フッサール, E. (2016). 内的時間意識の現象学 (谷徹, 訳). 筑摩書房 (ちくま学芸文庫). (Husserl, E. (1966). *Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewusstseins (1893–1917)*. In R. Boehm (Ed.), *Husserliana Bd. X*. The Hague, Netherlands: Martinus Nijhoff.)
- 木田元・野家啓一・村田純一・鷺田清一 (編) (1994) 現象学事典. 弘文堂.
- 木村敏 (1973) 異常の構造. 講談社 (講談社現代新書).
- ラングドリッジ, D. (2016) 現象学的心理学への招待——理論から具体的技法まで (田中彰吾・渡辺恒夫・植田嘉好子, 訳). 新曜社. (Langdrige, D. (2007) *Phenomenological psychology: Theory, research and method*. Harlow, UK: Pearson Education.)
- 丸山高司 (1985) 人間科学の方法論争. 勁草書房.
- メルロ=ポンティ, M. (1982) 知覚の現象学 (中島盛夫, 訳). 法政大学出版局. (Merleau-Pontly, M. (1945). *Phénoménologie de la perception*. Paris: Gallimard.)
- Morley, J. (1998). The private theatre: A phenomenological investigation of daydreaming. *Journal of Phenomenology*, 29(1), 116–134.
- 西研 (2001) 哲学的思考——フッサール現象学の核心. 筑摩書房.
- 西村洲衛男 (1978) 思春期の心理——自我体験の考察. 中井久夫・山中康裕 (編), 思春期の精神病理と治療 (pp.255–285). 岩崎学術出版社.
- 西村ユミ (2013) 現象学的な理論とその展開. やまだようこ・麻生武・サトウタツヤ・能智正博・秋田喜代美・矢守克也 (編), 質的心理学ハンドブック (pp.115–135). 新曜社.
- 岡田斉 (2011) 「夢」の認知心理学. 勁草書房.
- サルトル, J.-P. (1955) 想像力の問題——想像力の現象学的心理学 (サルトル全集第12巻) (平井啓之, 訳). 人文書院. (Sartre, J.-P. (1940) *L'imaginaire: Psychologie, phénoménologique de l'imagination*. Paris: Gallimard.)
- Seamon, D. (2000) A way of seeing people and place: phenomenology in environment–behavior research. In S. Wapner, J. Demick, T. Yamamoto, & H. Minami (Eds.), *Theoretical perspectives in environment–behavior research: Underlying assumptions, research problems, and methodologies* (pp.157–178). NY: Kluwer Academic/ Plenum Publishers.
- Spiegelberg, H. (1964) On the 'I-am-me' experience in childhood and adolescence. *Review of existential psychology and psychiatry*, 4, 3–21.
- スピーゲルバーク, H. (2000) 現象学運動 (上) (立松弘孝, 監訳). 世界書院. (Spiegelberg, H. (1994) *The phenomenological movement*, 3rd. ed. The Hague, Netherlands: Martinus Nijhoff.)
- 谷徹 (1998) 意識の自然——現象学の可能性を拓く. 勁草書房.
- ウスラー, D. (1990) 世界としての夢——夢の存在論と現象学 (谷徹, 訳). 法政大学出版局. (Usler, D. v. (1969) *Der Traum als Welt: Untersuchungen zur Ontologie und Phänomenologie des Traums*. Pfullingen, Germany: Günther Neske.)
- フォン・ウリクト, G. H. (1984) 説明と理解 (丸山高司・木岡伸夫, 訳). 産業図書. (von Wright, G. H. (1971) *Explanation and understanding*. NY: Cornell University Press.)
- 渡辺恒夫 (2009) 自我体験と自我論的体験——自明性の彼方へ. 北大路書房.
- 渡辺恒夫 (2010) 人はなぜ夢を見るのか——夢科学四千年の問いと答え. 化学同人.
- Watanabe, T. (2011) From Spiegelberg's "I-am-me" experience to the solipsistic experience: Towards a phenomenological understanding. *Encyclopaideia: Journal of Phenomenology and Education*, 15(29), 91–114.
- 渡辺恒夫 (2012) 自我体験研究への現象学的アプローチ. 質的心理学研究, No.11, 116–135.
- 渡辺恒夫 (2013) フッサール心理学宣言——他者の自明性がひび割れる時代に. 講談社.
- 渡辺恒夫 (2014) 『心理学における現象学的アプローチ——理論・歴史・方法・実践』(アメデオ・ジオルジ著, 吉田章宏訳, 新曜社刊) 書評. 科学基礎論研究, 41, 23–25.
- 渡辺恒夫 (2015) 他の誰かになる夢と間主観性. 情報コミュニケーション学研究, No.15, 51–64.
- 渡辺恒夫 (2016a) 訳者はしがき. コーンスタム, D. (著), 子どもの自我体験——ヨーロッパ人における自伝的記憶 (渡辺恒夫・高石恭子, 訳) (pp.i–v). 金子書房. (Kohnstamm, D.(2004). *Und plötzlich wurde mir klar: Ich bin ich!: die Entdeckung des Selbst im Kindesalter*. Bern, Switzerland: Verlag Hans Huber).
- 渡辺恒夫 (2016b) 夢の現象学・入門. 講談社 (講談社選書メチエ).

(2016.1.25受稿, 2016.12.12受理)